

冲

6
2015

第445期(冲)



潮うねり

能村 研三

梅雨の句

あたたかや路地奥にゐるコック帽

わつと煮る潮うねりの鹿尾菜かな

「閉ぢます」と老踊陶舗の夕朧

武器提げし剣士一団松の花

梅雨の句と言うと、そのほとんどが鬱陶しいものが多い。梅雨という季語が盛んに詠まれるようになったのは、大正期以降になつてからだそう、それ以前は「五月雨」「梅の雨」（うめのあめ）「梅雨」（ばいう）と詠まれていた。

どこよりか青梅雨の夜は藻の香せり
青梅雨や流木に知るものの果
部屋ごとにしづきありて梅雨ききす
男梅雨かな四五日は葦伏して

これは、先師登四郎の梅雨の句であるが、口頭から「晴れ男」「沖晴れ」と晴れを賞賛していたのに、意外と「梅雨」の句が多いように思う。登四郎は「梅雨」のような二文字の季語は、俳句の表現の上でいろいろ応用が効くので面白い俳句が出来ると言っていた。

「青梅雨」の季語は、比較的新しく、永井龍男の小説の題名から一般的に使われるようになった。梅雨を浴び

桜 葉 降 る 保 存 民 家 の 急 階 段

花 楓 葉 隠 れ 咲 き を 矜 恃 と す

緩 み な き 葉 整 へ て 黒 牡 丹

白 牡 丹 葉 突 き 出 し て 崩 れ け り

は や 傾 ぎ 雨 後 春 筍 の 勢 ひ あ り

溝 浚 へ 竹 組 み 蓋 の 被 せ あ り

てすくすく育つ木の青葉や草花を連想しながら用いるので、単に「梅雨」を用いる場合よりも鬱陶しさ、暗さがやわらぎ、しっとりした感じに包まれる。

まず五月末から六月初めの走り梅雨から始まって六月中旬の「入梅」本格的な「梅雨」「五月雨」となる。沢山降り続くような時は「荒梅雨」「男梅雨」と言い、余り降ること無く空振りの時は「空梅雨」と言う。そしていかにも降りそうな暗い空を「梅雨空」「梅雨曇」と言い、梅雨時の思わぬ冷え込みを「梅雨寒」「梅雨冷」と言う。また梅雨の間にふと晴天が覗けば、それを「梅雨晴間」と表現する。梅雨時も後半に降る大雨を「送り梅雨」と呼ぶ。そしていよいよ「梅雨明」となるのだが、しばらく晴天が続いた後に、また降り出した雨を「戻り梅雨」と言う。

今年の梅雨入りはいつごろになるかまだ判らなく、空梅雨になるのかそれとも当たり年になるのか、いずれにせよ大雨の被害が無いことを祈りつつ、梅雨を楽しみながら詠んでいきたい。

蒼茫集



玻璃戸 辻美奈子

それぞれの 成宮紀代子

清明や玻璃戸は子規のファインダー
逝く春の下がるものなき糸瓜棚
囀や子規のすなはち律の家
井戸埋めしあと山茱萸の花あかり
てふてふの来る片結び解くあひだ
喫泉にあぎと濡らしぬ鳥曇

それぞれの空気のちがふ花筵
越して来し窓に子の声桜東風
横浜は地番のはじめ鳥雲に
さくらさくら皇宮警察官不動
これしきの石に躓く花疲れ
ピザ窯に強き火残り花の雨

地べた 宮内とし子

力に 田所節子

山笑ふ地べたに撒ける鶏の餌
音階を知つてゐるかに春の風
浅草の春燈うるむ藍染屋
太棹の泣かせどころや梅若忌
次世代の受くる功罪よなぐもり
惜春の錠前固し子規の蔵

煉切に金の薬ある花ぐもり
明日あることを力に花の種
野のものの灰汁ぬいてゐる遅日かな
剪定や奔放なもの嫌はれて
陽炎や重心失せし豪華船
みな風に向き白鳥の引き間近

春のギャラリー 千田百里

手鍋提げし春巡り来て喜寿・傘寿
春愁や街の午鐘の遅れがち
囀のはみ出してゐる藪不知
前行くはモーゼか花吹雪を分けて
雑多否春のギャラリー東京例會発行二句子規の庭
春惜しむ鉄路幾すぢ俯瞰して

醤油味 安居正浩

子規庵に春の庭見る一机あり
花過ぎの団子は醤油味にせむ
縁側といふ春風の憩ふ場所
風の土筆雨の土筆に励まされ
青麦や九十歳の絵に力
医者へ行くための早起き花の雨

佳き節目 千田敬

春筍や一鍬気醜の狙ひ打ち
標本の兜虫磁気失せて春

さくら咲く日本の佳き節目かな
さくら爛漫樹下に佇つ冥さとも
節くれて仕事手といふ葛西海苔
雄蕊凜々古庭独占山躑躅

ビー・アンビシヤス 杉本光祥

火を放つ瞬のときめき枯野焼く
たをやかといふはこのことあさざくら
墓守のこと子に託す初ざくら
伸し烏賊を肴に本音花見酒
子規庵は我らが聖地風光る
「ビー・アンビシヤス」エルムの森の芽吹き急

称へつつ 甲州千草

格子戸の根岸裏道蝶の道
春惜しむ子規の机に触れもして
草芳し子規の衣干されぬし庭の
ほんたうは雨を好むや花の精
過去の酒これよりの酒夕桜
靴べらを渡す春月称へつつ

晚酌の量

小松誠一

朗報を告ぐや春泥跳ね上げて
街角の処々の菜の花明りかな
逆しまに蜜吸ふ鳥や朝桜
かこつくる晚酌の量春の風邪
一斉に羽搏けばたつ白木蓮
逃水や試乗してみる高級車

春場所

鈴木良戈

雛の日や浅草仲見世鶺鴒色に
通し鴨朝の水面を窪ませて
春場所の弾む応援小学生
木遣唄竿の雫に春光る
彼岸会や犬の墓にも花溢れ
金縷梅や風すこし起つ舟着き場

嘯

大畑善昭

嘯といふ字ややこし嘯れり
春の山石に矢割の打ち込まれ

自転車のパンク直して春の風
乳足りし赤子の眠り木の芽風
夜の梟雛を盗りたる少年に
行者にんにく殖やして十年後も元氣

並走

上谷昌憲

並走の電車が岐れ風光る
手拍子に隣る手締めの花筵
花ちらちら三分おきに電車発つ
老幹の七癖八癖花ふぶく
花万朶顔を無くして仰ぎけり
番鴨こもごも潜く花明り

竹の秋

河口仁志

ざつくりと起す土塊鍬始
雨晴れて耀歌の山の初音かな
菩提寺の裏の風騒竹の秋
どうしても合はぬ帳尻万愚節
子はいつか離れてゆくよ桃の花
邂逅の佳き友垣や花筵

足 下 溯 上 千 津

木釘うつ木槌やさしき花明り
足下しか見えぬ背曲がり青き踏む
山笑ふ創作料理の供御ひと椀
ひと言で済むこと言へずぬて余寒
花散らしの雨にも耐へて最晩年
花敷くや来し方すべて諾へり

春 渚 湯 橋 喜 美

捕込とっこめてふ下総台地草霞む
沈丁の香を着て講義流暢に
囀りや少年ボール拾ふ役
春渚きりなく作る砂団子
日当りへ出て行きたがる紙風船
茄子苗にか黒き客土選びけり

長閑なり 酒 本 八 重

糸遊や骨あることを忘れをり
クレソンの身震ひのたび水湧けり

仏 生 会 羽 根 嘉 津

竹の秋住職はいま揮毫中
農道の轍が濡れて桃の花
牛啼いて高麗郷ごそと長閑なり
草摘みし匂ひの中に葉書かく
木蓮の一途の白の鏝易し
御仏の伏し目この世の春愁ふ
薬やまだ世を知らぬ生一本
花冷の口の小暗き素焼壺
別れては寄り添ふ絆花笈
厚雲のほぐれ鳥翔つ仏生会

大 朝 寝 池 田 崇

坪畑にしてある算段地虫出づ
ぶつぶつと根を切り萩を根分けせり
残る雪踏みつつ囿ひ解きをりし
大朝寝夢の触りに父母の居て
引けば風抗ふ力増しにけり
鳥帰る姿とらふに手間どりて

御行の松 藤原照子

身中に夜も流水の音軋む
海見んと山焼の炎の駈けのぼる
子規庵の句座彷彿と蝶の昼
蒼穹へ御行の松の芯立てり
飛花落花子規球場のネット越し
一日を一語に執し著莪の花

逃げ水 梅村すみを

林間の淡き日差や花片栗
曖昧は大人の智慧や田螺鳴く
のどかなるもののひとつに鳶の笛
オムライス皿にこんもり山笑ふ
逃げ水に車つきつき溶けゆけり
春闌けて酒の恋しき夕べかな

朝寝 水上陽三

如月や先師激しき句をなせり
老いぬれば吾も潤ふ木の芽雨

朝寝せむすなはち若き日を恋へり
筧落つ水音に適ふ芹の花
朝寝して驀走の夢癒しける

棚組 吉田政江

おほまかな観光マップ島の春
病歴の癌のいつまで亀鳴けり
高齢に後期がついて菊根分
子規庵の隠れ家めきて鳥の恋
うららけし根岸の里の団子かな
子規庵の棚組しかと緑さす

卒業期 工藤節朗

水に五指立てて白鳥飛び翔てり
鉄棒に身動き出来ず春の雲
初泣の前歯の数を覗きけり
引力にどれも連なる春の海
旧姓の妻が集る卒業期

潮鳴集



文 机 七 田 文 子

春たのし光の遊ぶ橋の裏
弁当の仕切りきつちり囀れり
眉太く引く春愁を晴らさんと
文机は発信の場所松の芯
春惜しみ子規を思ひて座するかな

産 湯 峰 崎 成 規

あるやうな産湯の記憶花祭
行き帰り道を違へて春惜しむ
蜃氣樓先づあとがきを捲る本
くり抜^{子規庵吟行二句}かる机の虚ろ春惜しむ
春闌くや宇宙^{そら}を詠みきる二十坪

雲雀落つ 菊 川 俊 朗

雲雀落つしばらく空のきらきらす
とりあへず石蹴つてみる春の暮
塩むすびあれば全き春の山
花篝あの世この世を分かちたる
しやぼん玉残されてをり吹いてみる

真あたらし 富 川 明 子

詠まれてもよまれても桜真あたらし
土居跡に戦見てきし桜かな
亀鳴くや男の料理教室に
春の虹はやく早くと呼ばれけり
花ぐもり和綴の古書の仮名づかひ

沖作品



能村研三選

花仰ぐ今年は今年の思ひにて

千葉

竹内タカミ

千本の落花の中を行きにけり
見尽せぬままに散りゆく桜かな
さくらさくら背丈半分ランドセル
みどり児に遊ばされぬ日永かな
その先に春の何待つ長き列
たんぽぽの明るさに置くふくらはぎ
山桜風の白衣を装ひぬ
謝々の騒めく街や春闌けみ
夜に匂ふ父の手籠のさくら餅
春さなか山に登れぬ日の憂さよ
夕東風やサーカス小屋の灯の漏るる
永き日の出船の波の届きけり
浦々に水軍の裔松の花
朧夜や海峡またぐ橋灯り

東京

山下ひろみ

長崎

円城寺 清

早春の風に凜とし今ここに

北海道

頼田 幸子

雪解水手を貸してやる流れかな
鎮魂の祈り三月逝かしめる
見送るや声かけ合ひて鳥帰る
生かされて一日の重み芽立時
花万朶四百年の矜持かな
菜の花やただいまの声弾み来て
さざ波や目に促へたる桜東風
浅春の声ちぎれ飛ぶデッキかな
冴返る特急電車の通過音
先生も釣竿並べ春休
粗縄の結び目確と垣手入
先頭の声を信じて鳥帰る
おのづから花人となる上野かな

市川市

本池美佐子

千葉

塩野谷慎吾

沖作品 15句選評

*
能村研三

みどり児に遊ばされぬる日永かな 竹内タカミ

よく「孫俳句に名句なし」と言われている。孫というものは掛け値なしに可愛いもので、可愛さの余りべったりとなつて、詠む側の理性の制御が奪われてしまいがちになるからである。しかし、この句はそれを見事に払拭してくれた。勿論みどり児の可愛さを十二分に認識しながらも、みどり児を通じた自分が描かれているのが句を面白くした。子どもと遊んであげたつもりだったが、いつの間にか子どもに遊ばれている自分に軸足が移ったのである。日永の季語もうまく効かせた句となつた。

その先に春の何待つ長き列 山下ひろみ

日本人は「よく行列に並ぶ」と言われている。行列は「同調行動」のひとつで、「ほかの人がやっていることと同じことをしたい」という気持ちから行列に並んでしまつたらしい。これは「何の行列なんだろう」、「何かいいことがあるのかな」と、ふと足

を止めてしまうのは、自然な人間の行動なのだろう。作者も、街中でこの長い列は何なのだろうと思ひながら、自分もそれにつられて並んだかどうかは判らないが、「中七」の「春の何待つ」という措辞が詩的である。

浦々に水軍の裔松の花 円城寺清

水軍と言うと、瀬戸内海の村上水軍が有名だが、作者が住んでいる長崎にも松浦水軍があつた。長崎からはるか彼方の西方洋上の五島列島。ここには松浦水軍の末裔たちが隠れ家として居を構えたと言われている。今はこの末裔たちはその気概を守り続けながら漁業や農業を営んでいる。松の花は新芽が勢いよく真直ぐ立っていることに生命の勢いを感じるもので、この裔の生き様を象徴しているように思う。

生かされて一日の重み芽立時 頼田幸子

一年一年齢を積み重ねていくと、「あと自分に残された人生がどれだけあるのか」と思うことがある。何かの縁で出会つた人、せめて自分と出会つて良かったと、そう思つて貰えるような生き方をしなければということも考えたりする。単なる生に對する執着ではなくても、大いなるものによつて生かされている自分を、一日一日大切にしていかなければならないと思うのである。春になると植物は芽を吹き新たに漲る力が湧いてくるのだから。(以下略)